

佐藤 信・小口雅史編

『古代史料を読む』上・律令国家篇、下・平安王朝篇

黒須友里江

高校までの教科としての日本史と学問としての日本史が乖離していることは、多くの教員を悩ませている。ともすれば前者は知識の集積や暗記に傾いてしまい、一般社会の日本史に対する認識もそれに流されてしまっているくらいがある。本書は、この「教科としての日本史」と「学問としての日本史」の溝を埋めるべく刊行されたと言えるだろう。「歴史に興味のある一般市民のみなさん、あるいは大学でこれから日本古代史を学んでみたいと考えている高校生のみなさん、あるいはすでに大学史学科に合格して、いよいよ本格的に歴史学に取り組むことになる初学者のみなさん、あるいはすでに史学科に在籍して本格的に学び始めてはいるが、さらに新しい分野に取り組みたいという方」(上巻「はじめに」)を想定して企画された書であるが、決して内容に手抜きはなく、日本古代史の研究者にとっても主要な史料についての現時点での研究状況を概観するのに有益である。入門書は日々進展する研究を反映して定期的に更新されることが望ましいが、出版事情に鑑みるとそう簡単なことではない。そんな中で、近年研究における重要度が増している木簡や漆紙文書といった出土文字資料、また従来活用されてきた史料のテキスト批判に関わる最新の写本研究を扱った本書が刊行された意味は大きい。執筆担当者も第一線の研究者で、さながら豪華なオムニバス講義を受けてい

るかのようである。各巻の構成、執筆担当者は次のとおりである(□はコラム)。

上 律令国家篇

I 典籍と文学

①日本書紀・続日本紀・春名宏昭／②万葉集・佐藤信／③古事記・矢嶋泉／④風土記・坂江渉／⑤日本霊異記・三舟隆之／⑥伝記―唐大和上東征伝・須原祥二

II 古文書

①正倉院文書・佐々田悠／②正倉院文書(その2)―正税帳・小倉真紀子／〔正倉院文書の大宝二年御野国戸籍を読む・北村安裕〕／③正倉院文書(その3)―石山紙背文書の世界・小口雅史／〔正倉院収蔵の古地図―奈良時代荘園関係・飯田剛彦〕／〔史料としての經典跋文・野尻忠〕  
III 法制史料

①令―大宝令・養老令・坂上康俊／〔律の受容と運用をめぐって・小口雅史〕／②類聚三代格―律令国家篇・磐下徹／③延喜式・小倉慈司  
IV 出土文字資料

①木簡・渡辺晃宏／②漆紙文書・古尾谷知浩／〔墨書土器・武井紀子〕  
／③金石文―上野三碑を中心に・三上喜孝

下 平安王朝篇

I 典籍と文学

①本朝文粹―慶滋保胤「池亭記」を読む・新井重行／②今昔物語集・戸川点／〔往生伝・大日方克己〕／〔性霊集〕の蝦夷知識・小口雅史

／「菅家文章・浜田久美子」／③意見十二箇条・佐藤信／「入唐求法巡礼行記・浜田久美子」／「古語拾遺・菊地照夫」／④陸奥話記・佐倉由泰／⑤後三年記・野中哲照

## II 古文書

①尾張国郡司百姓等解文・榎本淳一／②款状（申文）―応徳三年正月二十三日付「前陸奥守源頼俊款状」を読む・小口雅史

## III 古記録

①御堂関白記・近藤好和／②小右記・稲田奈津子

## IV 法制史料

①政事要略・北村安裕／「朝野群載―「国務条事」をめぐって・宮川麻紀」／②類聚三代格・磐下徹／③延喜式―平安時代篇・小倉慈司／④北山抄―吏途指南・森公章／「儀式書―西宮記を例に・丸山裕美子」／「令義解・令集解・大隅清陽」

## V 絵巻物

年中行事絵―承安五節絵・遠藤珠紀

## VI 古代史料の周辺

書風と文房四宝・島谷弘幸

本書は入門書ではあるが、開いてみるとステレオタイプの一般書とは異なることが分かる。上下巻を通じて徹底されているのは、各史資料がどのように伝来し現存しているのか、信頼できる活字本・注釈書は何か、データベース等も含めたアクセスの方法、そして史資料本文を読む（基本的に写真版から釈文をおこし、読み下し、解説する）、という四点

について字数を割いて丁寧扱っていることである。学問に忠実であるゆえに専門用語もふりがな（・解説）付きで多く使われており、流し読みで簡単に理解することはできないが、じっくり読むことで「史料を読む」にはまず「史料にたどり着く」ことが必要であるという研究の難しさ・おもしろさを体感することができる。以下、具体的に本書の特徴を挙げていこう。

特徴の一つとして挙げられるのは、異なる観点から複数回にわたって取り上げられている史料があることである。具体的には、成立・伝来が複雑な正倉院文書を、正倉院文書の全体像・正税帳・石山紙背文書（加えてコラムで莊園絵図・経典跋文）という観点からそれぞれ異なる担当者が執筆している。史料そのものになじみが薄い場合、史料が紙というモノであること、裏を反故として利用すること、貼り継ぎ・切断・はがし取り・継ぎ直しが繰り返されること自体新鮮であろう。また、残された手がかりから文書を元の形に復元していったりどのような用途・機能を持ったのか考えたりという作業は、非常に頭を使うぶん分かった時の喜びは大きい。『類聚三代格』と『延喜式』は上下巻それぞれで取り上げられている。二章セットで読まれることを想定しているのであろう、それぞれ同じ執筆者が担当している。どちらも、一つの史料でありながら一・二世紀という長期にわたる時代性を有するものであり、編纂史料や法制史料を扱う際の注意点が凝縮されている。『類聚三代格』については、上巻では「九世紀の史料」として用いる場合、太政官符や勅といった原書式が法令集にされる過程でトリミング・加工されたものである（＝原文書ではない）こと、関係する他の格を踏まえて理解する必要がある

ある（＝単独では理解できない場合がある）ことに留意しなければならないと解説する。下巻では十一世紀成立の史料に八世紀の法令が「現行法として」収載されている事例を取り上げ、数行の中に史料の成立といった大きな問題に関わるヒントが含まれている可能性を述べ、無意識に働く現代の感覚を取り払って史料と対峙する必要性を再認識させられる。『延喜式』について、上巻ではその先行法令集である弘仁式・貞観式について詳しく解説し、「弘」「貞」「延」などの標注を鵜呑みにせずどの時期のどの官司のものか、関連史料を用いながら読み解く過程を解説する。下巻では延喜式の編纂過程を「延喜式覆奏短尺草」（延喜式草案）についての醍醐天皇の意見に対する編纂担当者からの回答原稿）を取り上げながら詳述し、延喜式が基本的に奏進された延長五年段階の現行法令ではあるものの理念と現実の乖離があるという、特に十世紀以降の史料を読む上では必ず念頭に置かなければならない重要な点を指摘する。以上のように、複雑な史料に対しても簡略化することはせず多面的に史料の性格を述べるといふ形が採られている。

近年積極的に史料として活用されている出土文字資料を取り上げていることも、大きな特徴である。出土文字資料は、文字を読むことはもちろん、考古、また時には科学的知見も同時に駆使しなければ理解することができないという扱いづらさを持つが、各章ではどのような経緯で現在の状態に至ったのか、資料の持つ意味を考察する方法が明快に説明されている。まず、木簡については形状・材質・出土位置から多面的に検討する方法を実例に沿って解説する。ほとんどの場合意図せず残ったものである木簡は、律令国家の政治・社会の実態を伝えてくれる。公式令

に規定されていない書式で記された文章や木の堅牢性を利用した税物進上のための荷札の解説を読めば、漢字文化や木と文字の距離についての現代とは異なる感覚を体感でき、それらを使用した古代の人々を身近に感じられるだろう。手軽に利用できるデータベースも紹介するが、史料として用いる際には出典を確認する等の基本姿勢も強調する。漆紙文書は木簡より一般にはなじみが薄いと思われるが、どのように使用されていたものなのか詳しく説明されており、発掘調査に詳しくない読者にも親切である。また、漆紙文書は断片的資料であることを免れられないが、令文を始めとした他史料や出土状況と照合することで本来の姿を考察する過程を具体的に説明しており、推理小説のように楽しむことができる。以上のような出土文字資料の性格・扱い方の指南書は、史料としての歴史が比較的浅いこともありこれまであまりなかったが、本書で得られる基礎知識は、研究はもちろん、博物館等の展示を見る際にも大いに役立つ。金石文の章で扱われている上野三碑は、個人でも自由に見に行くことができる。本章では上野三碑から在地支配の方法とその変遷、上野国に多く居住した渡来人の影響が読み取れることを指摘し、正史や中央の史料からは見えない地方支配の様相を堪能できる。出土文字資料は扱いが難しい代わりに、全国で発見されるものであり最も身近な史料と言える。

第三の特徴として挙げられるのは、扱う史料の多彩さ・幅広さである。例えば年中行事絵は、入門書で大きく扱われるのは珍しい。絵画＝美術品と思いがちだが、作成された背景・目的、模本の系統を探るといった歴史学の手法を経ることで史料としての価値を持つものもある。

本章が取り上げる「承安五節絵」については、絵・詞書と内裏図（『拾芥抄』）を掲げつつ解説しており、儀式次第をストーリーとして受け入れやすいよう工夫されている。このように、本書では「史料」の一般的イメージとは異なる史料も詳しく紹介されている。一方で、史料名は一般によく知られているが具体的な内容についてはあまり知られていないものもある。「尾張国郡司百姓等解文」はその最たる例であろう。本章では、これが作成された背景やその後の経緯を詳しく説明している。高い教養・文筆能力を有する人物の手になると思われる四六駢儷体の文章、上訴の背景にある地方支配の複雑な構造、結果として元命の受領功過が「過に非ず」とされたこと等、史料のイメージががらりと変わるだろう。加えて注目されるのは、「書風と文房四宝」の章である。史料の性格を考える上で「モノ」情報は欠かせなくなっているが、日本史を学んでもこういう知識をきちんと学ぶ機会は少ない。さらに書風については美術の面からの研究が蓄積されており、容易に把握することはできない。そんな中、本章では史料を扱う上で必要な知識がコンパクトにまとめられており、様々な場面で役立つはずである。

内容が豊富なため一部しか紹介することができなかったが、本書全体が最も強く伝えていることは史料批判の重要性である。簡単に入手できる活字を鵜呑みにせず、誰が・いつ・どんな目的で作ったものでどのように伝来したのか、また信頼できるテキストはどのように得られるか、足許を確かめながら慎重に史料と向き合うことは、日本古代の史料に限らずあらゆる情報に通用するリテラシーである。決して「簡単に分かりやすい日本史」の本ではないが、「学問としての日本史」に少しでも関

心があれば手に取っていただきたい。さらに言えば、日本史への関心が薄い方にとっても、「史料を読む」手法を理解することは、情報の溢れる現代社会を生きる上で有益であることは間違いない。

（上巻・三〇九頁、二〇一八年三月刊行 下巻・二九三頁、二〇一八年

六月刊行、ともにA5判、同成社、本体価格三八〇〇円＋税）

（くろす・ゆりえ 東京大学史料編纂所助教）